

## 野生動物による農作物被害を防ぐには

<何故サルは畑を荒らすのか？>

NO.10

山梨県でサルによる被害が深刻になり始めたのは平成に入ってからです。何故被害が発生しているのか、その理由について考えてみましょう。



京都大学霊長類研究所の室山氏によれば被害発生 のしやすさは次の3要因によって決まります。

- A 農作物の食物としての価値
- B 農地への接近のしやすさ
- C 農作物へのサルの依存度の高さ

### Aの価値とは

農作物の質、農作物利用の可能性、野生食物の質、野生食物利用の可能性から決まります。つまり、里(畑)に十分な食べ物があればそれを利用しようとするし、山に十分な食べ物があれば、里の価値は相対的に下がるわけです。

ここから考えられる、農家の方ができる対策としては

「収穫残渣を残さない」、「収穫しない果樹は伐採する」という従来から言われてきた当たり前の答えがでてきます。自給的な野菜畑などで、収穫しなくなったナスやトマト、カボチャなどが秋まで放置されていませんか？

### Bの接近のしやすさとは

柵などの目に見える障害と、人馴れのように目に見えない障害があります。

補助金をもらって作る電気柵は確かにサルにとって「里(畑)にちかづきにくく」するものですが、道路などで柵が設置できず侵入可能な部分が残されやすいといった側面もあります。

里(畑)を利用し始めると、サルの人馴れもどんどん進み、人を見てもあまり遠くに逃げなくなってきます。これを放置すれば、人を見たら怖がるといった目に見えない障害はどんどん壊されていきますから、根気よく追い払いを続ける必要があります(追い払いについては資料 No.11を参照)。

### Cの依存度の高さとは

サルには「いつも畑を荒らす群れ」と「山奥でしか見ない群れ」がいます。

Aの価値やBの接近のしやすさが同じであるにもかかわらず、同じ地域でこれらのサルが同居する理由は、「どれだけ農作物の味を占めたか」にあるといえます。現在サルの被害が発生している地域であっても、いきなり今の状態までサルが「悪さ」をするようになった訳ではなく、次第に農作物を荒らし、味を占め、頻りにやってくるようになったはずで

逆に言えば、「味を占めた＝農作物に依存した」状態から昔の「山奥のみの生活」の状態に戻すことができれば、被害低減に結び付くわけです。

実際には、「農作物の食物としての価値(A)」や「農地への接近のしやすさ(B)」を改善することにより、山奥で生活するサルに戻す他ありませんが、これを怠ると「農作物へのサルの依存度の高さ(C)」は、さらに高くなります。